

# 主体的に学習に取り組む態度を育成する 保健体育科の授業実践

—「粘り強さ」と「自己調整」を育む球技の教材開発—

富岡 宏健 齊藤 一彦 小木曾 航平 原田 央 松本 茂

Abstract: This study examined the kinds of teaching materials and evaluation methods for promoting independent learning in health and physical education ball games in junior high schools. First, teaching materials were developed using Tchoukball. Next, to examine evaluation methods for independent learning attitude, which includes two elements of "perseverance" and "self-regulation of learning, a class practice was conducted using a portfolio-type worksheet based on One Page Portfolio Assessment theory in the developed unit. Furthermore, the class practice was open to the public, and its effectiveness was analyzed based on discussion session records and students' free descriptions. The results suggest that it is possible to promote the self-regulation of learning by devising teaching materials from a methodological perspective. Moreover, using portfolio-type worksheets allowed learners and teachers to share evaluation information, implying the possibility of respecting student independent learning and fostering their proactive attitude toward learning.

## 1. はじめに

### 1-1 資質・能力の柱「学びに向かう力、人間性等」

2021年度より改訂の全面実施を迎えた中学校学習指導要領では、資質・能力の柱が3本に整理された(中央教育審議会, 以降中教審と略記, 2016)。3つの資質・能力のうち、「学びに向かう力、人間性等」については、旧観点の「関心・意欲・態度」であった頃より、これらが情意領域に関係するため評価することが難しいと指摘されていた(石井, 2023)。この「学びに向かう力、人間性等」は、「主体的に学習に取り組む態度」として、観点別評価(学習状況を分析的に捉える)を通じて見取ることができる部分と、個人内評価を通じて見取る部分の2つに整理されている(中教審, 2016)。このような整理は、これまでの「主体的に学習に取り組む態度」の学習評価の実態があいまいであったことを示唆しており、加えてこれまでの旧観点「関心・意欲・態度」の評価で起こっていた問題点とともに、評価の意義について改めて強調されることにもつながった(国立教育政策研究所, 2019)。

### 1-2 主体的に学習に取り組む態度の評価

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「単に継続的なやる気(側面①)を認め励ますだけでなく、教科として意味ある学びへの向かい方(側面②)ができていくかどうかという、『出口の情意』(石井, 2021, p. 174)を意識することが肝要である。この「出口の情意」とは、「知識や考える力とともに意識的に指導することで育んでいける教科の目標として位置づけうるもの」(石井, 2023, p. 48)を指す。一方で、溝上(2022)は、評価を行う現場の実情として「具体的な観点が①粘り強さ、②自己調整であると示されても、学校現場では、その変更や違いが一体何を指すのかが今ひとつわからない」(p. 12)と指摘している。このことは、多くの学校で主体的に学習に取り組む態度の評価の在り方について、苦慮している現状を表している。

特に、「評価の観点そのものが曖昧だけでなく、評価の妥当性と信頼性を担保して、保護者や児童生徒への説明責任を果たすことができる有効な評価方法が開発されていない」(田中,

---

Hirotake Tomioka Kazuhiko Saito Kouhei Kogiso Akira Harada Shigeru Matumoto ,  
Cultivating a proactive attitude toward learning classroom practice in health and physical education:  
Developing teaching materials for ball games to foster tenacity and self-regulation

2022, p.9) ことも課題であるとされている。この状況により、従前の態度の評価の問題点を曖昧にしたまま教育活動に取り組むことで、問題が改善されるどころか、問題が深刻化してしまうのではないかと危惧される。

### 1-3 保健体育科における主体的に学習に取り組む態度

各教科の中でも保健体育科に目を向けると、体育科教育2022年7月号では「『主体的に学習に取り組む態度』を高める授業づくりと評価」として特集が組まれているように、主体的に学習に取り組む態度に関する関心は高い。一方で、主体的に学習に取り組む態度の指導事項は「愛好的態度及び健康・安全を共通に、公正（伝統的な行動の仕方）、協力、責任、参画、共生の内容で構成」（石川，2022，p.24）とされており、他教科と比較しても要素となるものが多く、複雑であるのが保健体育科の特徴でもある。そのため、保健体育科における、「主体的に学習に取り組む態度」の評価は一層難しさを感じることに繋がっているのではないだろうか。

また、学習者に視点を移すと、運動の苦手な生徒にとっては、他者の目に運動の経過や結果がさらされるため、学習意欲を失ってしまう可能性が指摘されている（木原，2014）。学習意欲の低下は、「主体的に学習に取り組む態度」の側面①にも影響するものと考えられる。そのため、何を学んでいるかということを生徒が自覚することのできる、教材開発が重要となるのではないだろうか。そしてその教材による学習を通して、生まれつきの差があって学習ではどうにもならないという「遺伝決定的な能力観」（木原，2014，p.99）を変えることによって、学習意欲を高めることが保健体育科の授業では肝要であるといえる。

### 1-4 研究の目的とリサーチ・クエスチョン

そこで、本研究は、主体的に学習に取り組む態度を育成する保健体育科の授業実践とはどのようなものを指すのか、という点を、球技の教材開発を通して検証することを目的とする。その中で、「主体的に学習に取り組む態度」の育成をめざす保健体育の実践として、次に示す2つの下位課題を設定した。

- ①「主体的に学習に取り組む態度」の育成をめざす教材とはどのようなものが考えられるか。
- ②どのような学習評価を行うと、「主体的に学習に取り組む態度」の育成つながるのか。

これらのリサーチ・クエスチョンを解決することを目指して、主体的に学習に取り組む態度を育成する教材と評価方法について検討する一助とすることを目的とした。

## 2. 研究の方法

### 2-1 教材の開発

まず、「出口の情意」（石井，2021）を見取ることができるようにするためには、指導内容を明確化した教材の開発が求められる。さらに、その教材は、自身の技能が劣っていると考える差別的な能力観や遺伝決定的な能力観を揺さぶる指導を授業の中に位置付けることが重要であると考えた。

学習指導要領には教材としていくつかの種目が例示されているため、素材として取り扱うべき種目を、そのまま教材として扱うことも多く、課題として指摘されている（岡出，1998）。また、体育は学習の成果が運動という形で目に見えて現れるため、運動の苦手な生徒にとっては、既存の例示されている種目ではすでに学習意欲が低下している可能性が危惧される。そこで、本研究においては、学習指導要領に例示されていない種目を素材として教材開発を実施することとした。

本研究では、球技ゴール型のハンドボールに焦点を当てて教材開発を行った。特に「下位教材」（岩田，2012，p.27）という概念を用いて、チュックボールという種目を取り入れた。

チュックボールは、1チーム12人の2チームがエンドラインに固定された弾力のあるネットに、ボールをシュートし合い、相手チームがキャッチミスした回数を競う種目である（落合，2015）。チュックボールの導入により、球技への愛好的態度を高め、全員参加型の教材として設定した。ハンドボールとの違いは、「シュートしただけでは得点にならず、ネットから跳ね返ったリバウンドボールを守備側がダイレクトでキャッチすることを試み、守備側がキャッチに失敗すれば攻撃側の得点となる」（落合，2015，p.1161）ところである。このようなスポーツの特徴を生かして下位教材として単元内に組み込むことで、主体的にプレイに参画する環境条件を整えるとともに、その中で、キャッチやパス・シュートといった最低限の技能獲得にもつながることができるように考慮した（写真1）。



写真1 授業の一場面

チュックボールは多くの生徒が未経験の種目である。チュックボールの教材化により、運動経験による潜在的な劣等感や無力感を無くすように、条件的に整備した単元開発を行った。

また、教材としてのチュックボールが、生徒の「教科として意味ある学びへの向かい方」(石井, 2021, p. 175)につながっているかどうかを検証するために、公開授業として、大学教員、附属学校教員(開催校, 他附属), 大学院生, 大学生などに公開し, その成果を多面的・多角的に検証できる場を設けた。

## 2-2 学習の評価方法の選定

石井(2023)によると, 評価には, 「見取り」「評価」「評定」の3つの意味が混在する。教科として保健体育科の学習が始まる中学校以降では, この中の「評定」が重要視され, 目標が評価に準拠していない実態や, 評価疲れしてしまう現状もある。そのような事態を避け, 「生徒の学力と成長と発達を保障する」(石井, 2023, p. 16) 評価を目指し, 本研究における評価とは, 形成的評価として, 生徒の学習状況を理解し, 生徒の力を伸ばすことに影響する評価のことと定義した。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価の手法としてポートフォリオ型ワークシートを用いた評価方法を取り入れた。その原型は堀(2019)の一枚ポートフォリオ評価(One Page Portfolio Assessment, 以下OPPAと表記)である。この方法は, 学習者自身が自己のモニタリングやメタ認知を行える点で, 実技が多い保健体育科での学習に適していると考えられる。一方で, 堀(2019)は, 同時にOPPAは点数化やランク付けを行わない原則も付記している。しかし, 「主体的に学習に取り組む態度」に関しては, 各教科の学習評価の観点となっていることも考慮しなければならない。そのため, OPPAで活用するワークシートの形式を活用し, 学習履歴を記入する際に, 教師側から意図的に発問して記入させることによって, 学習としての評価や学習の評価になりうるように配慮した。

## 2-3 研究対象

対象はH中学校3年生2クラス(計79名)を対象とした。そのうちの1クラスでの実践を, 公開授業として設定し, 参観者の意見についても分析対象とした。

公開授業は2022年11月10日に実施し, 協議会の参加者の属性は大学教員, 高等学校・中学校教員, 大学院生・大学生であった。授業参観には, 小学校・幼稚園教諭も参加があったが, 協議会には参加していないため, 今回は対象外とした。

なお, H中学校3年生2クラスの生徒については, 研究の参加の可否は成績に反映されないことを申し伝えた上で, 生徒本人並びに保護者に研究に関する同意を得て進めた。

## 2-4 分析方法

まず, 出口の情意の測定として, 高田ら(2003)の先行研究をもとに診断的・総括的授業評価の質問紙調査を10月の単元前と12月の単元末に実施し, 量的評価として検証した。そして, 双方の結果をもとに質的・量的の両側面から分析を行った。

また, 授業協議会の結果については, 久保(2020)が提案するワークシートを活用して協議会運営を行った。その際, カテゴリーに分類された付箋紙を分析対象として採用し, 書かれてある内容についてテキストマイニングを用いて分析を行った。テキストマイニングにより, 文書形式のデータを定量的な方法で分析することが可能になる(牛澤, 2018)。なお, テキストマイニングには, KH Coder3を利用して行った。

これらの分析に対して, 質的研究における研究の妥当性と信頼性の担保の観点(メリアム, 2004)から, 複数の調査者による検証を行い, 調査結果の現実的妥当性について協議を行った。なお, 分析に当たっては, 授業者と大学教員と体育科教育学を専攻する大学院生により分析を行った。

## 3. 結果

### 3-1 開発した教材の実施

まず, 主体的に学習に取り組む態度を育成するための球技ゴール型ハンドボールの授業として, 次のような単元を考案した(表1)。

単元の最中には, 一枚物のポートフォリオに授業感想を記入するようにした。その際に, 単なる感想の記入といった自由記述ではなく,

「チーム全員で攻撃するためにはどのような練習に取り組めばよいか（参画）」「チームの課題を明らかにして、次の練習にどう生かすか（協力）」といったように、「主体的に学習に取り組

む態度」にかかわる保健体育の指導事項を考慮した課題を出し、それに応じた記述をするようにした（写真2）。

表1 単元計画

1時間目	2・3時間目	4時間目	5・6時間目	7・8時間目	8・9時間目
学習のねらいと主な活動					
「試しのゲーム」 ・円陣パスによる投能力調査 ・基本のルールに則った、試しのゲームの実施	「ボールをつなぐ」 ・いろいろなパス回し ・ネットの跳ね返りのキャッチ	「力強いボールを投げる」 ・シュート練習	「ボールをどう受け取るか」 ・オフザボールムーブメントの獲得	「ドリブルの追加」 ・ドリブルの追加 ・ルール変更による攻守の戦術・作戦の考案	「ハンドボールゲーム」 ・ゴールをハンドボールのゴールに置き換えてのゲーム大会
ミニゲーム					
指導上の留意点					
新体力テストの結果から、投能力が高くないことが実態として明らかとなったので、ボールを小学生用のハンドボールにすることで、投げやすさに配慮した。安全面への配慮から、事前にボールに慣れる時間を確保した上で、試しのゲームを実施した。	キャッチに課題があると試しのゲームで判明したため、パスよりキャッチに重きを置いたパス回しを行った。ルールを、守備側がキャッチすることで守備側の得点加算へと改編した。	キャッチに重きを置いて学習を進めたため、点が入りにくい状況が出てきたため、ハンドボールの接続を見越した、ジャンプシュートの活動を取り入れた。	生徒が、ゴール前での攻防がスポーツの特徴であると気づいたため、ボールを持っていない時どのような動きが出来るか考えられるように、アウトナンバーを取り入れた活動を実施した。	チュックボールはハンドボールの下位教材として取り入れたため、その接続としてまずはドリブルを入れることから開始した。そのルール改編によって、戦術に幅が生まれ、チームでの作戦考案の時間も確保した。	ドリブル有、接触の無いボール奪取というルールの改編によって、ハンドボールに近い形でのゲームを実施した。ゴールは、ハンドボールのゴールを活用した。
試しとまとめのゲーム以外でも必ず一時間の最後にミニゲームを入れた。そうすることによって、本時の課題解決に向かう活動が、ゲームの展開に沿っているか、また新たな課題が表出していないかの確認ができるようにした。					

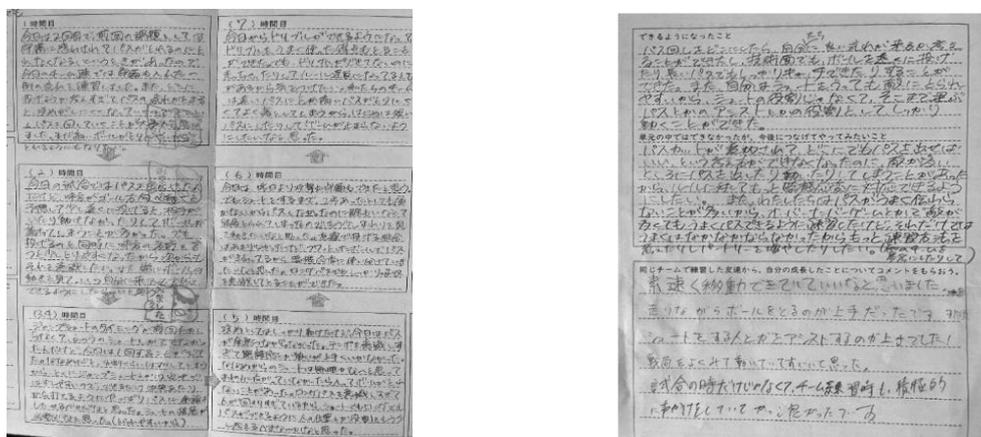


写真2 ポートフォリオの一例

### 3-2 生徒の質問紙調査の結果

生徒への質問については、高田ら（2003）の中学生を対象とした授業評価尺度を用い、表2に示した項目について3件法で実施をした。「はい」「どちらでもない」「いいえ」の順に、3点から1点と得点化し、その平均値を単元の前後で比較した（表中の（ ）は標準偏差を示す）。さらに、先行研究に示されているように、「たのしむ（情意目標）」「できる（運動目標）」「まなぶ（認識目標）」「まもる（社会的行動目標）」の4因子に5項目ずつ分類し、その結果を、診断基準（表3）をもとに判定した。実施時期は単元前の調査が10月末、単元末調査が12月上旬であった。

また、単元末調査においては、本研究の目的である、主体的に学習に取り組む態度について生徒の視点から分析を行うため、「授業では、粘り強く取り組む力が育つと思う」、「授業では、自らの学習を調整しながら学び進めることができたと思う」という2つの質問を加え、その理由を自由記述で回答を求めた。また、本研究では、指導要領に例示されていない種目を単元の一部で取り扱った。そこで学習指導要領に示された種目との関連性調査という観点から、「チェックボールの授業では、サッカー・バスケットボール・ハンドボールの授業と比べると主体的に取り組めた」という質問項目を追加し、その理由を自由記述で調査した。

Q17	体育が始まる前は、いつもはりきっています。	2.34(0.68)	2.31(0.63)
できる（運動目標）		11.46	11.54
Q6	体育で、グループで作戦をたててゲームや競争をします。	2.92(0.28)	2.94(0.24)
Q9	体育で、他の人が応援しているとき、応援します。	2.92(0.38)	2.87(0.42)
Q10	体育をしているとき、うまい子や強いチームを見てうまくできるやり方を考えることがあります。	2.85(0.36)	2.87(0.39)
Q15	体育では、友達や先生が励ましてくれます。	2.79(0.49)	2.79(0.45)
Q20	体育のグループやチームで話し合うときは、自分から進んで意見を言います。	2.43(0.67)	2.51(0.59)
まなぶ（認識目標）		13.90	13.97
Q1	体育で、ゲームや競争をするとき、ずるいや卑怯なことをして勝とうと思いません。	2.74(0.57)	2.72(0.60)
Q4	体育では、ゲームや競争をするときは、ルールを守ります。	2.95(0.22)	2.97(0.17)
Q14	体育で、ゲームや競争で勝っても負けても素直に認めることができます。	2.85(0.40)	2.85(0.40)
Q18	体育では、いたずらや自分勝手なことはしません。	2.89(0.32)	2.88(0.33)
Q19	体育では、クラスやグループの約束事を守ります。	2.93(0.25)	2.94(0.24)
まもる（社会的行動目標）		14.36	14.36
総合評価		52.92	53.42

表2 調査結果一覧（3件法、因子別）

番号	質問項目	10月単元前 平均点 (SD)	12月単元後 平均点 (SD)
Q3	体育では、みんなが楽しく勉強できます。	2.46(0.65)	2.67(0.47) ※ $p<0.05$
Q5	体育をすると体が丈夫になります。	2.74(0.48)	2.73(0.45)
Q8	体育は、明るくてあたたかい感じがします。	2.52(0.62)	2.61(0.55)
Q12	体育では、精一杯運動することができます。	2.82(0.43)	2.79(0.41)
Q16	体育では、運動がうまくなるための練習をする時間がたくさんあります。	2.66(0.60)	2.75(0.47)
たのしむ（情意目標）		13.20	13.55
Q2	体育では、いろいろな運動が上手にできるようになります。	2.52(0.67)	2.64(0.57)
Q7	私は少し難しい運動でも練習をすることでできるようになる自信があります。	2.20(0.83)	2.16(0.77)
Q11	私は、運動が上手にできる方だと思います。	1.72(0.80)	1.73(0.79)
Q13	体育では、自分から進んで運動します。	2.67(0.54)	2.69(0.53)

質問紙調査の結果より、単元前と単元末で比較した際に、平均得点が向上していたのは、表2に示した順に、質問番号3、8、16、2、11、13、6、10、20、4、19の11項目であった。その中で質問項目10を除く10項目で標準偏差が下がっていた。また、質問項目3については、有意に上昇していた ( $p<.05$ )。また、4因子の合計得点は表3にしめす高田ら（2003）の評価基準によると+の域に達していた。

### 3-3 協議会の記録

協議会は、付箋紙に自分の意見を書きながらグループ討議を中心に運営した。本研究においては、成果を検討するために、授業を参観して参観者がよいと思ったことを分析対象とした（写真3、4）。

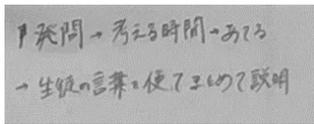


写真3 付箋紙の抜粋

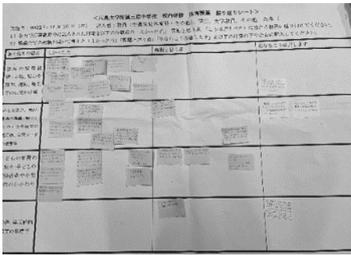


写真4 協議会で用いられた集約表

このように記録された付箋紙のテキスト化を行い、そのデータを基に KH Coder を用いた定量分析を行った。その中で、「共起ネットワーク」というものを用いて分析した。共起ネットワークは円の大きさが頻度、線の太さは関連性の強さを表し、語と語のつながり（共起性・関連性）を視覚化した分析手法である（牛澤，2018）。他の語との関りが弱い場合や単独で使用されやすい語は表示されないの注意が必要ではあるが、簡単で直感的にとっても分かりやすいという特徴をもつ（牛澤，2018）。その結果は図1から図3に示す。

表3 診断的・総括的授業評価の中学生評価基準

項目名	+	0	-
たのしむ（情意目標）	15.00～12.11	12.11～9.86	9.85～5.00
できる（運動目標）	15.00～11.28	11.28～8.80	8.80～5.00
まなぶ（認識目標）	15.00～11.95	11.95～9.72	9.72～5.00
まもる（社会的行動目標）	15.00～13.48	13.48～11.48	11.48～5.00
総合評価	60.00～47.45	47.45～41.22	41.22～20.00

【引用】高田ら（2003）p.162

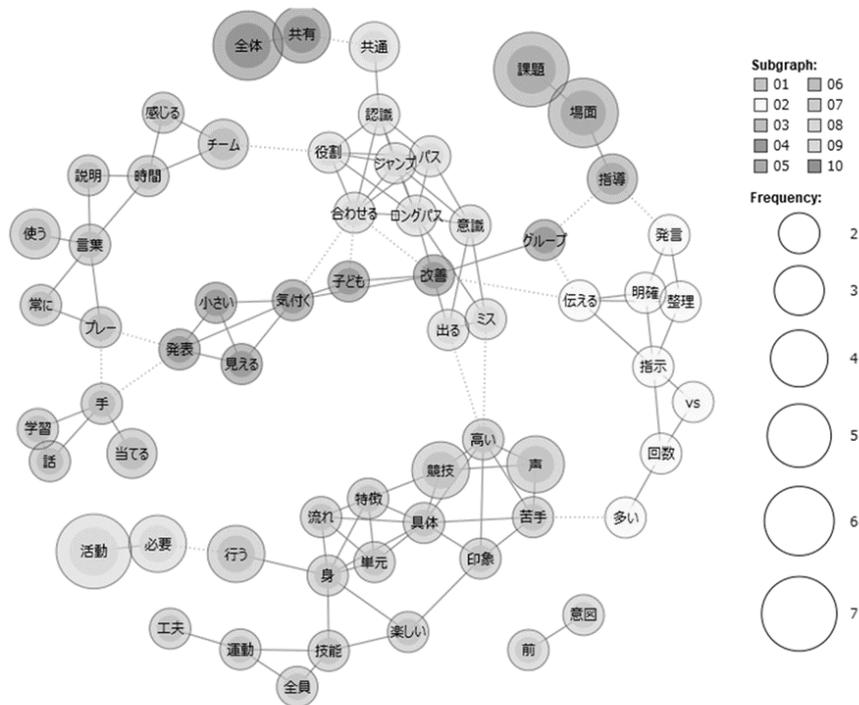


図1 共起ネットワークの結果（授業研究「成果」のコメント）

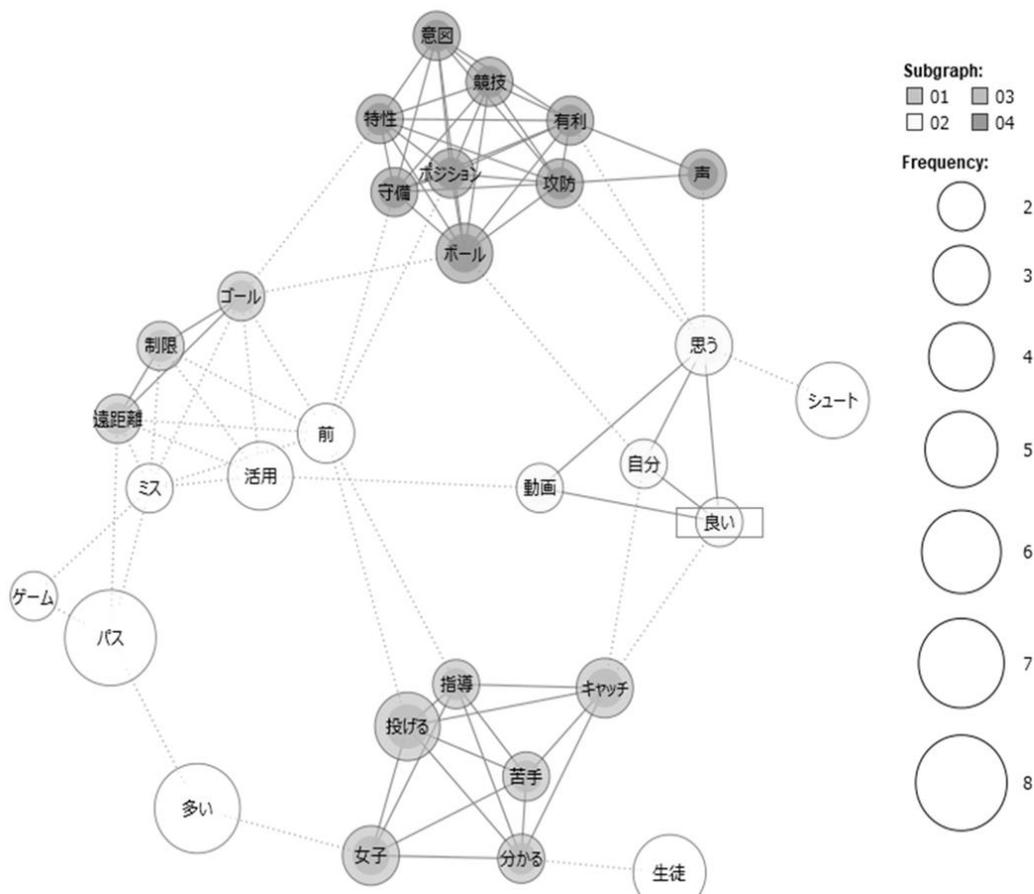


図2 共起ネットワークの結果（授業研究「課題」のコメント）

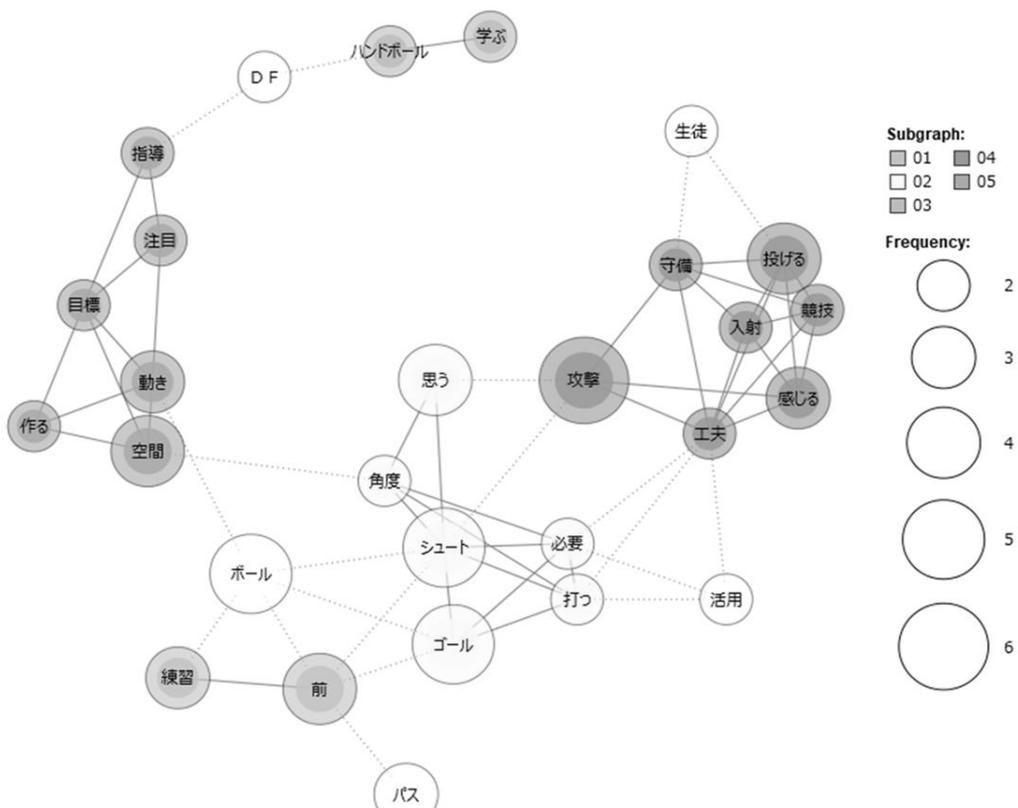


図3 共起ネットワークの結果（授業研究「改善策」のコメント）

#### 4. 考察

##### 4-1 生徒が主体的に学ぶ教材としての効果

本研究における教材は、学習者が経験したことのない種目を取り扱っているという点が特徴的である。その観点から、教材としての効果を検討したい。

まず、「体育では、みんなが楽しく勉強できます。」という質問項目において、単元の前後で対応のある t 検定を実施したところ、有意水準 5% で単元後に有意に上昇しているという結果がみられた。また、「たのしむ (情意目標)」「できる (運動目標)」「まなぶ (認識目標)」の 3 因子で単元前と比較すると増加しており。全ての因子と総合評価において、評価基準の+に当てはまる結果が得られた。特に、「質問 3 : 体育ではみんなが楽しく勉強できます」の項目において、単元前後の結果に有意な差がみられた。このことから、生徒は学習を通して学習することの楽しさを味わっていたものと推察される。

吉永 (2013) は、ゴール型のボールゲームは、刻一刻と変化する状況の中で、戦術的知識に基づき状況判断を行い、技能として能力を発揮することは生徒にとって決して容易な課題ではないと指摘している。シュツクボールは、パスカットが禁止されており、ハンドボールと比較すると容易な運動課題であるといえるだろう。このことが、生徒にとって困難すぎる課題ではなく、適切な困難さを有しており、うまくいかない課題に対しても少しずつ解決をしていこうとする姿につながったと考えられる。

また、単元末には、主体的に学習に取り組む態度に関する調査として次の 3 つの質問項目について 3 件法 (はい、どちらでもない、いいえ ; 「はい」から順に 3 点、2 点、1 点と数値化) で質問している。

##### 【質問①】

シュツクボールの授業では、粘り強く取り組む力が育つと思う。

##### 【質問②】

シュツクボールの授業では、自らの学習を調整しながら学び進めることができたと思う。

##### 【質問③】

シュツクボールの授業では、サッカー・バスケットボール・ハンドボールの授業と比べると主体的に取り組めた。

質問①については得点が 2.90 (±0.35)、質問②は得点が 2.82 (±0.42)、質問③は 2.63 (±

0.54) という結果であった。それぞれ、自由記述で理由を回答させているが、質問②については次のような回答が得られた。

##### 【質問②に対する理由】

- ・パス、シュートなど自分の得意なこと・苦手なことを分析して自分の練習ができたから。
- ・自分たちのチームは何が足りないか考えて練習計画を立てることができたから。

これは、練習方法を考えたり、戦術を考えたりする思考にもつながっていることを示唆するものであると考えられる。下位教材の導入によって運動課題を容易にしたことによって、学習内容が明確になり、「試行錯誤や知的な工夫としての『主体的に学習日取り組む態度』」(石井, 2023, p. 32) の具体の姿となって現れたのではないかと推察される。

また、やったことのないゲームであることについても言及している意見があった。質問③において、「はい」と回答した生徒の理由記述には、次のような回答があった。

##### 【質問③に対する理由】

- ・やったことがないスポーツだし、初めは全く勝てなくても本気でやろうと思ったため。
- ・サッカーとかバスケットは経験者がとても有利だけど、シュツクボールは、そんなメジャーな競技ではないと思うので、有利とか不利がなかったから。

このように、生徒にとって、みんなが授業で初めて学ぶスポーツであったからこそ、公平であると感じ、誰もが同じような課題にぶつかり、同じように解決することが可能である、という課題解決に向けた可能性を感じ取ることができた結果ではないだろうか。

以上の点を整理すると、下位教材としてシュツクボールを教材化したことの有用性が検討できる。岩田 (1994) は、体育の教材づくりにおいて、運動やスポーツといった素材を内容的視点と方法的視点の観点から再構成することの重要性を指摘した (図 4)。本研究においては、特に、シュツクボールというまだ経験したことのないスポーツによる、学習機会の平等性と、

何を学んでいるかが明らかになることによる興味・関心の喚起が行われている。生徒の視点に立つと、方法的視点の観点を明確に教材に含む

ことの重要性が改めて重要であることが示唆された。

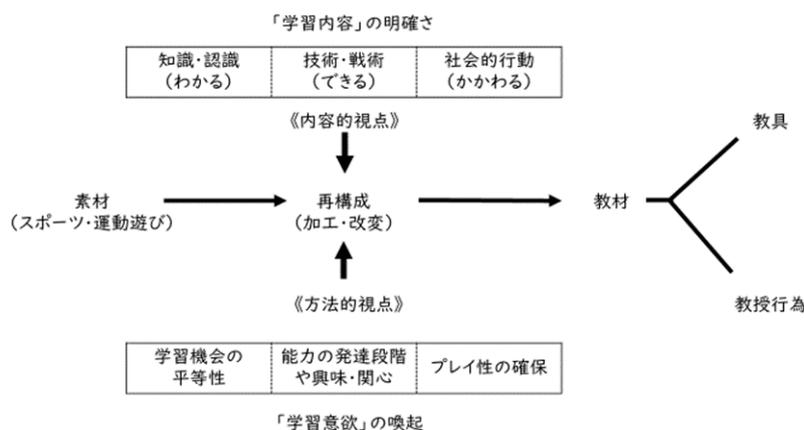


図4 体育の教材づくりの過程とその内容的・方法的視点

【引用】岩田（1994）p. 31

#### 4-2 学習者とともに行う評価

共起ネットワークの結果を見てみると、[課題] - [場面] - [指導] や [全体] - [共有] などのネットワークに代表されるように「成果」として認められた点は、教師の教授行動に着目したものが多かった。他方、教授行為は充実していたため、教材に議論が集中したことが「課題」や「改善策」の結果から認められた。この点を踏まえて、評価方法について検討したい。

単元末に行った3つの質問に対し、「質問①：チュックボールの授業では、粘り強く取り組む力が育つと思う。」という設問では次のような回答が得られている。

##### 【質問①に対する理由】

- ・試合で負けたときに、負けただけで終わらせるのではなく、なぜ負けたのか、なぜうまく行かなかったのかをグループで話し合い、より良いチーム、試合になるように粘り強く取り組まないといけないから。
- ・試合で出来なかったところや苦手なところを考えて次の授業ではそこを中心に練習を考えたりしたから

これらの結果から、自己評価によって活動を振り返る活動が、次の学習への意欲につながっていたと推察される。

本研究において、単元内では、グリフィンら（1999）の戦術アプローチ（Tactical Games Approach: TGA）を参考に、ゲームを中心に組み立てている。そして、そのゲームでの気付きを、OPPAの手法を参考に作成した、ポートフォリオ型ワークシートに記載するとともに、改善策についてグループ内で交流する時間を設けるように単元を進めた。

質問②の自由記述に、「振り返りシートを毎回書いたことで、その日のうちに振り返って次の授業のときに活かすことができたと思うから。」とあった。ポートフォリオ型ワークシートを導入し、1時間ごとに課題を明らかにしながら学び進めた。そうすることで、生徒にとって、現在何を学んでいるかが明らかになり、学ぶ意欲が生まれ、主体的に学習に取り組めたものと推察される。このことから、ポートフォリオ型ワークシートを用いた自己評価の有用性について示唆された。

加えて、授業研究で示唆された[課題] - [場面] - [指導] というネットワークにも注目したい。本研究における評価とは、「生徒の学力と成長と発達を保障する」（石井，2023，p. 16）評価としての、形成的評価を指す。この形成的評価には、教師の指導や支援も含まれる。今回、ポートフォリオ型ワークシートを作成したことにより、教師も生徒の学習状況を把握することが容易になり、授業計画や展開に生かすこ

とが可能となった。その結果、授業研究においても「授業の動画を見せて説明して、シームレスな場面で相手に捕られる場面があることの課題を理解させた」という意見に代表されるような授業計画や展開の具体につながっており、[課題]－[場面]－[指導]というネットワーク生成につながったものと考えられる。

以上の点を踏まえると、評価の具体的な方法を充実させるとともに、評価の概念の転換が今後は求められよう。石井（2023）は、形成的評価の意義が、教師が使う学習のための評価のみならず学習者が活用するものへと変化してきていると指摘している。今後は、評価について学習者間や教師と学習者の間で共有し、評価自体を「対話的に共有・共創」（石井，2023，p.136）することが重視されるのではないだろうか。

#### 引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会（2016）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)（2023年11月17日閲覧）
- 2) 堀哲夫（2019）『新訂 一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』東洋館出版。
- 3) 石井英真（2021）IX 指導要録 5 「主体的に学習に取り組む態度」の評価「よくわかる教育評価 第3版」ミネルヴァ書房，p. 174-175.
- 4) 石井英正（2023）『中学校・高等学校 授業が変わる 学習評価深化論』図書文化社。
- 5) 石川泰成（2022）主体的に学習に取り組む態度の評価の時期と方法，体育科教育，68（7）：24-27.
- 6) 岩田靖（2012）『体育の教材を創る 運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて』大修館書店，pp. 27-28.
- 7) 木原成一郎（2014）『体育授業の目標と評価』広島大学出版会。
- 8) 久保研二（2020）授業の省察についての授業研究の役割，木原成一郎・大後戸一樹・久保研二・村井潤・加登本仁編『子どもの学びがみえてくる体育授業研究のすゝめ』創文企画，pp. 17-24.
- 9) 国立教育政策研究所（2019）「学習評価の在り方ハンドブック（令和元年9月）」[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/gakushuhyouka\\_R010613-01.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/gakushuhyouka_R010613-01.pdf)（2023年11月17日閲覧）
- 10) 溝上真一（2022）「関心・意欲・態度」から「主体的に学習に取り組む態度」「個別最適な学びへ」，体育科教育，68（7）：12-15.
- 11) 文部科学省（2019）「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編」東山書房。
- 12) 中國昭彦・堀哲夫（2017）「OPPA の汎用性に関する研究—附属小学校校内研究の推進を中心として—」教育実践学研究，22：125-142.
- 13) S・B メリアム（2004）「質的調査法入門教育における調査法とケース・スタディ」ミネルヴァ書房，p. 90.
- 14) 高田俊也・岡澤祥訓・高橋健夫（2003）「体育授業を診断的・総括的に評価する」高橋健夫編著『体育授業を観察評価する』明和出版，pp. 8-11，162.
- 15) 落合文夫（2015）チュックボール；中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則（2015）21世紀スポーツ大事典，大修館書店，p. 1161.
- 16) 岡出美則（1998）「素材主義の克服に向けた諸提案」体育科教育，46（13）：66-68.
- 17) 岡出美則（2020）「2020小学校体育改革のキモ」体育科教育，68（3）：16-19.
- 18) 田中博之（2022）「判断基準と評価作品を明確にしたルーブリック評価の大切さ」，体育科教育，68（7）：9.
- 19) 牛澤賢二（2018）『やってみようテキストマイニング—自由回答アンケートの分析に挑戦！—』朝倉書店。
- 20) 吉永武史（2013）ゴール型ゲームを成功に導く授業計画の条件，体育科教育，61（2）：14-17.